

修道

No. 73

題字は吉田學(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園(中・高)同窓会

〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241-8291 FAX(082)249-0870
TEL(082)241-6686(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp



2010年度 修道学園(中・高)同窓大会

この度の東北関東大震災において、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧復興をお祈り申し上げます。

目次

同窓会ニュース

2010年度修道学園(中・高)同窓大会を振り返って
内藤 貴明 …1588

支部だより

近畿支部総会報告……………湯谷 正司 …1591

同期会報告

四期会総会報告……………河野富士雄 …1593

特別寄稿

285年祭 講演「修道はなぜ藩校の流れを汲んでいるといえるのか」
晶 眞實 …1594
修寿会報告……………木村 正勝 …1602
ねんりんピック石川大会に出場して…林 孝治 …1603

人物往来

わが心の自叙伝……………竹本 成徳 …1605
音戸温泉湧く興味……………新田 時也 …1614

学園だより

広島修道大学50周年記念事業報告 ……1615
第63回修道高等学校卒業式 ……1617

連合会ニュース

広島修道大学50周年に協賛
2団体公演・10団体の記念誌を出版援助…仲井 正美 …1618

事務局だより

平成23年度同窓大会開催一覧 ……1620

訃報

訃報記事 ……1620

同窓会ニュース

2010年度修道学園（中・高）同窓大会を振り返って

2010年修道学園同窓大会 世話人代表
内藤 貴明（高54回）

2010年度修道学園同窓大会が多くの来場者のもと成功裏に終わりました。

改めまして皆様にお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

我々54回は、昭和58年・59年生生まれの赤バッジです。当時、モーニング娘。・MD・携帯電話・PHS・ルーズソックス・コギャルといった言葉が飛び交っておりました。中学生のころはクーラーのない教室でしたが、高校時代にはクーラーの効いた教室で授業を受け、学食は旧体育館2階の味と新校舎1階の味で育った学年です。

また、中学生の時、自転車通学者はしっかりヘルメットをかぶっておりましたし、伝統でありますマラソン大会も走りましたし、体育祭では6年生の演目である仮装行列にも、しっかり熱をいれました。先輩から受け継いだ伝統をしっかり継承した学年です。

そんな54回が卒業9年目に、同窓大会の世話役という大役を仰せつかりました。あまりに荷の重い大役に、腰がひける同期もおりました。しかし、我々54回の思いは1つでした。

やるからには絶対に成功させたい！

同窓生のみなさんに喜んでほしい！

伝統ある修道が広島に君臨していると外部にアピールしたい！

歴史に残る同窓大会にしたい！

そして何より、

【修道を卒業して良かったと思える時間を共有したい】

個々に思いは違えど、走り始めた54回の思いは、字のごとく「猪突猛進」でした。

53回先輩からのバトンを受取り、走り始めた同窓大会の企画会議。

集まりはしたけれど、何をしたいのかわから

ない・・・広島に何人の同期がいるかわからない。何も対策を打てないので先輩からガンガン怒られる・・・という悶々とした日々を過ごしておりました。

そんな中、私が学生のころに行われた関東修道会総会で、目の前で見た吉川晃司先輩のライブパフォーマンスが脳裏をかすめました。吉川先輩の男気あふれるライブパフォーマンスに一種の衝撃を覚えました。その衝撃は、参加されていた多くの同窓生も同じように感じられたはず。なぜなら、みなさんの顔が「笑顔」だったから。

その「笑顔」という花を広島でも咲かせたいと強く思うようになりました。同期と幾度となく会議を重ね、やはり広島の同窓大会を盛り上げるためには、「笑顔」という花を咲かせるためには、吉川先輩のお力を借りるしかないという結論に至りました。

多くの諸先輩方のご協力のもと、吉川先輩にアプローチをし、我々が抱く熱い熱い思いを先輩にお伝えしました。もちろん、出演が叶わないことも想定にはありました。

しかし、吉川先輩の一言は、

「かわいい後輩が言うて来てくるんじゃけえ、ぜひ一緒に頑張ろうや！できることは限られとるけど、精一杯やるよ！」

この言葉を聞いた瞬間、「修道でよかった！修道ってすごいなあ」正直な感想です。

吉川先輩の出演OKが出た以上、下手な演出ができない、来場者が少ないなんてあり得ない、予算が足りないなんてありえない。新たな問題が浮上し始めていました。

同窓大会2か月前、4のつく会を行いました。この会議では、怒られることが明白な会議でした。なぜなら、今年度の予算に対し、「0」が1桁足

りなかったからです。出席した同期が危機感を覚えたことはもちろんのこと、何より4のつく会の先輩に心配の種を残す形になってしまいました。

ここからが、我々の見せ場！なず・・・でした。危機感を覚えれば、もちろん行動しますし、助けも求めるはず・・・同期が結束して。。しかし、想定にないことが起き始めていました。

それは「同期の結束」が強固なものになっていなかったことです。原因はもちろん私にありました。同期の集まりに仕事の関係上参加できておらず、コミュニケーションも取れなくなり、気づけばメールと電話で指示と報告だけを行ういわゆる事務的な関係になっていました。

恥ずかしながら、そんな危機をご指摘いただいたのは、先輩方でした。

正直、きついご指導でした。お酒の場でしたが、ビールも喉を通らないくらい、ましてや酔うことすらできないくらい、厳しく指導されました。

いろんな先輩にご指導いただきましたが、共通することは、

「長い人生、苦しい時も楽しい時も一緒に共有できるのは、同期なんだ！」ということです。

そこから、自分のスタンスを変えました。世話人代表は、自らが率先して汗をかき、頭を下げ、頭を悩ませ、ヘロヘロになる極限まで走り続ける姿を見せることで、同期の士気を高めることを知りました。

ヘロヘロになりつつある私を、同期がサポートし始めてくれたことは言うまでもありません。その中で、何物にも代えがたい強い「結束」を我々は手にしました。

迎えた同窓大会当日。今年は、例年と趣向を変えて、修道の卒業生だけではなく、卒業生のご家族にもご案内をお出ししました。正直、何人の方が来られるのか、料理は足りるのか、混乱は起らないのか、お釣りの用意は大丈夫なのか・・・不安がよぎり、前日はほとんど寝付けませんでした。

林理事長・高木同窓会会長代理・田原校長ほか、多くのご来賓のご出席のもと、同窓大会がスター

ト。至らない点も多くあったかと思いますが、我々に一生懸命のおもてなしをさせていただきました。

懇親の時間、ビール片手に諸先輩からいただいた、叱咤激励の言葉や、お帰りの際、「今日は、ほんまに楽しかった！ありがとう！」と僕に抱きついてくださった先輩の姿に、「喜んでいただけたんだな」という安心感が生まれました。校歌斉唱の際、会場を取り巻く輪が人が多すぎて入りきらず、中央で方を組まれていた先輩がいたこと、本当にうれしい光景でした。肩を組んで校歌を歌うみなさんが、「笑顔」だったことに、1つ成功を確信しました。

同窓大会の世話役を務めさせていただく中、先輩との縦のつながりももちろん強固にさせていただきましたが、同期との結束、この同窓大会で本当に強固なものにさせていただきました。

54回が内部分裂状態にあった時、私を正してくれたのは同期でした。同期の温かい気持ちと、内藤を支えてくれた気持ちに心から感謝です。同窓大会の世話役を通じて、今まで出会えてなかった同期とも頻繁に会うようになり、今では1か月に1度は飲みに出ています。バカを言い、時には喧嘩をし、それでも修道の懐かしさに酒を酌み交わした日々は、貴重な思い出です。

先輩方が歩かれてきた人生という長く広い大きな道を、我々54回が一丸となって人生を歩んでいける喜びを感じています。人生で躓くこともあれば、道を外れてしまうこともあるはず。それでも、修道という学び舎で学び、苦楽を共にし、同じ深紅の赤バッジをつけた54回の絆は永遠のものであると信じています。真っ赤に燃える赤のごとく、いつまでも炎を絶やさない熱き思いを持つ54回でいたいと思っています。

同窓大会運営にあたり、無謀な挑戦を応援して下さった中村副会長はじめ、4のつく会の先輩のみなさん、本当にお世話になりました。

終わりに。私、内藤貴明は修道高校を卒業して誇りです。修道魂を胸にこれからの長い人生を歩んでいきます。

ありがとうございました。修道万歳！！



世話人代表挨拶



32回生母校に寄付



54回世話人挨拶



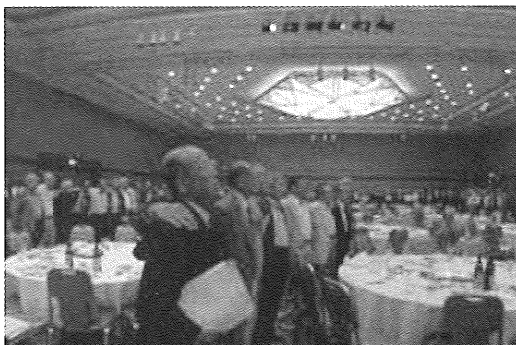
55回世話人挨拶



校歌斉唱



校歌斉唱



校歌斉唱



万歳三唱

平成22年度修道学園同窓会近畿支部総会報告

湯谷 正司 (高校22回)

毎年12月に恒例の平成22年度近畿支部総会は、平成22年12月5日(日)午前11時より、今年もハビス大阪6階のガーデンシティクラブ大阪オリオンの間で開催されました。朝から好天に恵まれ、絶好の同窓会日和となりました。

今年は医師や教師の方々が出席しやすいように、久方振りに日曜日開催となりました。その甲斐あつてか、これまで参加したくても出来なかった方も多数出席されました。

今年は、昨年皆無のドタキャンが4名いた為、残念ながら長年の目標である出席者100名以上の達成こそ出来なかったものの総員98名と近年まれに見る多数の出席者を得て賑やかな総会となりました。

司会は今年で4年連続となる35回畠さん(7回畠元校長のご子息)、さすがに4回目ともなると慣れたもので、玄人はだして立派に進行役を務められました。

まず会長の16回西原さんから、開会の挨拶を述べました。

出席者及び各来賓へのお礼の後、今春発刊の同窓会名簿の情報をベースに、若い層への働きかけを強化した結果、今年度の総会は、目標の出席者100名以上の達成が目前であり、非常に喜ばしいと述べられました。

次いで、副代表幹事で会計担当の22回湯谷から会計報告を、またこれを受けて17回の監査結城さんから監査報告をそれぞれ行いました。

引き続き来賓のご挨拶に移りました。

トップバッターは、田原校長。広い会場の隅々まで響き渡る張り艶のあるお声で、気合の入ったスピーチをして頂きました。

まず今年の8月15日に母校十竹ホールで開催された高22回(1970年卒業)の卒業40周年記念・合同卒業式で来年還暦を迎える卒業生に現役の校長が始めて卒業証書を授与したとの報告がありました。この学年は、当時学園紛争によりバリエード封鎖や機動隊出動を経験し、全国でも初めての

「分散卒業式」だった為、卒業生から40年振りに合同卒業式をやりたいとの熱い申出を受けた。しかも、式前にサッカー大会をすること。怪我をするから危ないと言うと同期の医者連れてくるから大丈夫と、世話役のパワーに圧倒され許可をした。当日、テレビ局から3社、新聞社多数の取材を受け、インタビューでは、学園紛争当事者の卒業式をよくぞ校長が許可したと記者から言われたとのこと。また、当日の様子を朝刊二誌(朝日新聞社と中国新聞社)に掲載されたとのこと。

ついで本題の母校の近況報告です。

先日行われた入試説明会は、2000名を超える出席者が集まり、この少子化時代にまだまだ人気不衰えていないこと。

運動部では世界ジュニアでの活躍が光る陸上短距離を筆頭に、ワンダーフォーゲル班、さらには文化部でもスクールバンド班が全国吹奏楽コンクールで銀賞を受賞するなど例年全国レベルの素晴らしい成績を収めており、これほど幅広い分野で活躍している学校は修道をおいてなく、このことは、修道がいかに多彩な才能をもつ人材の宝庫であるかということの証明であると述べられました。

次いで同窓会本部を代表され10回の高木一之本部同窓会長代理より祝辞をいただきました。

この中で、田原校長が就任されてから進学実績が下降気味であった母校が見違えるように蘇ったこと。週刊誌には古豪復活と書かれ、こんなにも学校が変わるものなのか、先生の動きを見ると実感したと述べられました。

また、来年は本部同窓会が100周年を迎え、同窓生名簿を充実したものにしたいこと及び多数の方々からの浄財・寄付の協力要請がございました。そして、いよいよ講演の部へと移りました。

今年の講師は15回の野間 昭典さん。「40年の研究生生活を振り返って」というテーマで、一貫して研究されてこられた心筋細胞の生理学について、

細胞モデルによるメカニズムを分かりやすく説明していただきました。

講演の中で、先生は科学・文学・宗教は究極のところ生命の追求ではなかろうかと言われたのが、大変印象に残りました。

最後に、修道の卒業生として出来るだけ貢献するとともに、後輩も育てて行きたいとの固い決意を述べて講演を終わられました。

講演会終了後、吉井副会長のご発声による乾杯の後、なごやかな雰囲気うちに食事・歓談へと移りました。

今年の呼び物は、マジシャンビリーこと副島雅之さん(29回)によるハンドパワーによるマジックショーです。全員が固唾を呑んで見守る中で、ネックレスとリングやトランプなどを巧みに操って聴衆を煙に巻かれました。

基本的な技でも数百回以上の練習が必要だとのことでした。

最後には、一度種を明かすと二度と使えないと云われているにも拘らず、種明かしまでして頂きました。

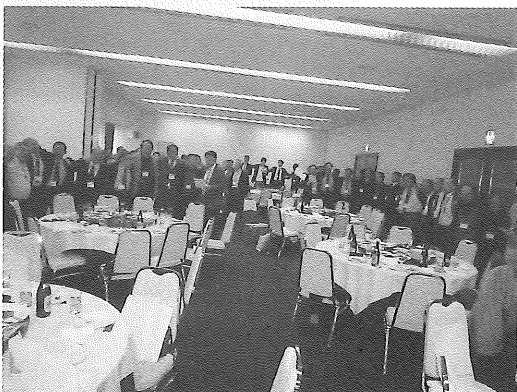
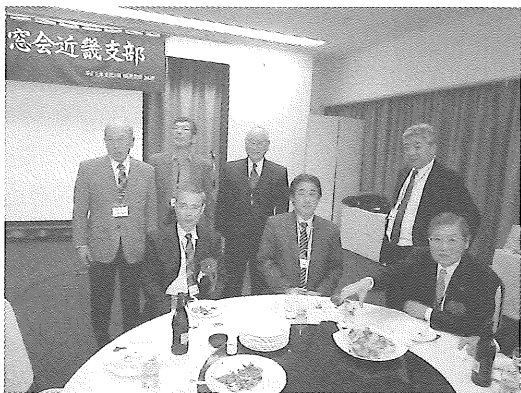
その後、上記合同卒業式のDVDの放映を観な

がら、しばらく歓談の後、宴もたけなわにさしかかった頃、本日出席の若手の方(52回:長崎良太さん、53回:古谷昭典さん、54回:国貞栄二さん)の3名に登壇して頂き、本日の感想、修道に対する想いを語ってもらいました。

終盤になり、今年も昨年のゲストスピーカーの近藤さん(29回)によるイタリアナポリ民謡サンタ・ルチアのメロディーに載せた替え歌などの後、いよいよ例年の呼び物の全員が輪になっての近藤さんの名リードによる校歌斉唱で最高潮に達しました。

最後に齋本代表幹事(17回)による閉会宣言でお開きとなりました。

今年の総会で特筆すべきなのは、25回以降の若手の方の参加が昨年の5名から23名と大幅に増えたことです。昨年より参加者が24名増えた分の75%を若手の方が占めるという、今後の総会運営に非常に明るい兆しが見えてきたといえるでしょう。これも、本総会のために遠方のところ早朝から駆けつけていただいた来賓の皆様方、講演者更には同窓会本部事務局ご担当者のお力添えのお蔭と本紙面をお借りし心からお礼を申し上げます。以上



四期会総会報告

河野 富士雄 (高校4回)

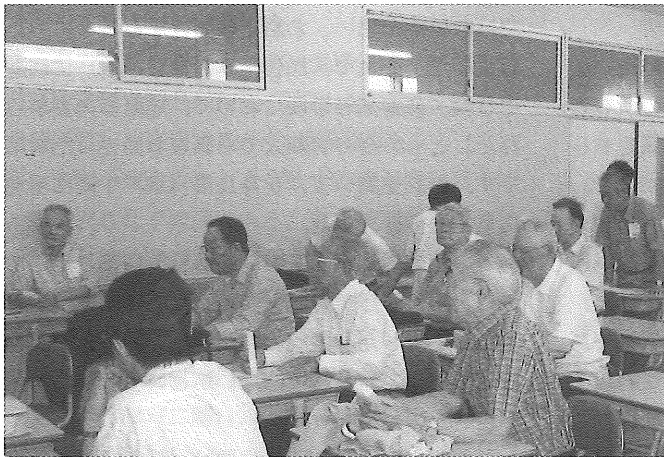
四期生は昭和27年に卒業してから58年、毎年定例会を開くようになってから38回目になります。例年6月第二土曜日夜の開催が定着しておりますが、一昨年の同窓大会から当番学年の10期ずつ上の先輩が当番学年に協力するということになりました。今年の当番は54回ですから、我々は協力学年のトップということになります。「協力」とは要するに同期をなるべく大勢動員すること、と解釈しました。併せて我々の想い出づくりのチャンスとも捉えました。同期世話人協議の結果、今年の四期会総会は同窓大会当日の午後、会場は母校の普通教室、勢いを駆って同窓大会に出ようと決まりました。

9月4日午後4時、半世紀以上昔の生徒会幹部、中丸哲夫元生徒会長、皆川孝一元自治審判委員長が東京、横浜から駆けつけてくれるなど、28名が4年(高1)3組の部屋に集まりました。残暑が

酷暑だったのは想定外でしたが、我々の頃の、冬は寒風、夏は熱風が吹きこむ隙間だらけの木造校舎と違って、クーラーの効いた教室は快適でした。我々が高2のとき、国体サッカーで初の全国制覇を成し遂げた、それに因んで記念品のロゴマーク入りボールペンは現役の中学サッカー班キャプテンから手渡してもらいました。

学校ですから、ここで飲食するわけにはいきません。「総会」だけにして改築されたばかりの素晴らしい体育館を見学してから同窓大会に乗り込みました。同窓大会では、当番学年の温かいご配慮で、開宴に先立つ乾杯に4回生全員をステージに上げてもらいました。私的にも、四期世話人代表として50歳若い人たちと同じテーブルで会議したことは、たいへん嬉しい体験でした。54回の皆さん、いろいろありがとう。

平成22年11月記 河野富士雄(元生徒会副会長)



現在の教室での総会風景



昭和26年頃の校舎

特別寄稿

285年祭 講演「修道はなぜ藩校の流れを汲んでいると言えるのか」

修道学園史研究会会長 畠 眞 實 (元校長：高7回)

はじめに

学問所の蔵のこと

きっかけは古い建築物の研究をされている建築家の加藤早苗さんからわたしどもの修道学園史研究会への電話でした。広島市東区愛宕にある土蔵のことについて話を聞いて欲しいということでした。加藤さんはご夫婦とも建築家です。ご夫婦で、14年前から愛宕の土蔵について研究されていたということでありました。加藤さんは、この蔵のことについて、日本建築史研究の第一人者である広島大学大学院教授の三浦正幸先生に相談されたということでした。

2010年4月3日の中国新聞に、三浦先生のコメントとして「確定はできないが、良質な角材を使った梁など内部構造から城内の蔵にまず間違いない。」と載せられています。「御三」（ごさん）の蔵ということから恐らく「三の丸」にあったと蔵であろうとも推測されています。

「貴重な史的建築物であり、解体は将来に悔いを残す」と言っておられました。この土蔵の所有者は「明治の始めに広島城の『ごさん』の蔵をもらい受けた」と言い伝えられてきたと言われている。この土蔵は原爆で被災し、現在かなり老朽化しており、所有者の方が近く解体撤去して、その場所に新たに建物を建てたいということでありました。所有者は、「この土蔵を保存してもらえるのであれば、無償で譲ってもよい。この土蔵をこれ以上このまま放っておくことは出来ない。」ということでした。

加藤さんは貴重な文化財なので、広島市によって保存してもらいたいと、広島市文化財課に申し入れられたそうですが、文化財課では、「確証がなく文化財指定に至っていない。そのため予算づけはできない。」との回答であったと言われました。



そこで、何とか保存することはできないであろうかと考えられて、学問所に深い修道へ話をしてみようと思われ、そのきっかけとしてわたしどもの研究会へ電話をされたということでありました。

わたしどもの会は、謂わば勝手に作った会で、現実にこの土蔵をどうするかということに関しては何らの力も権限を持つものではありませんが、折角の要望であるので、話はお聞きしてもいいのではないかと思い、お話をお聞きすることにいたしました。それで、2010年6月9日（水）に修道中学校・修道高等学校において、加藤ご夫妻からわたしどもの会の者四人でお話をお聞きした次第です。お話を聞いて、6月19日（水）午後に現地に見学に行きました。

この蔵の外側がトタンで蔽われていました。このことが、原爆での焼失を免れたのではないかと言うことでした。学問所の蔵として、書類・文書などを収めていたのではないかというのが、加藤早苗さんの見解でした。

なお、学問所のあった位置は、現在のNTTと広島地方裁判所の間前の道路部分であろうと推察されます。

その後、学園本部において、この蔵に関してさらに調査された結果などからほぼ以下のような見解をまとめられました。

▲広島城三之丸学問所から移築されたとされる裏付けとして

明治の初め、「御三」の蔵を浅野さんから曾祖父である広島藩士山口愛次郎が譲り受けたものである。浅野さんからいただいた城の蔵（衣装蔵）と言われている。（現在の所有者重谷昌江さんの談）

1. 愛宕の蔵所有者の曾祖父（山口愛次郎氏）は「藝藩志第21巻」（文献出版）86頁、鼓手 三石 山口愛次郎と記載がある。（調査の結果）



2. 愛宕の蔵は梁や柱の削り方から200年くらい前に建てられたものと考えられる。梁や柱などの構造材（梅）が使われており、このような立派な素材が通常、土蔵に使われることはあり得ない。1間の長さが広島城と同じであり、広島城にあった土蔵に間違いない。（広島大学 三浦正幸教授（工学博士））
3. 愛宕の蔵の屋根瓦刻印（製造元印）が広島城から発掘された瓦刻印（塩利（愛媛県今治市の菊間瓦）と合致する。（加藤早苗氏）
4. 愛宕の蔵の大きさと合致する蔵が古図面・広島城三之丸学問所にある。広島城郭の古図面に40あまりの蔵があるが、2棟愛宕の蔵と同じ大きさの蔵がある。（加藤早苗氏）
5. 修道学園記念品室に展示されている「旧藝藩学問所」の配置図（皇太子殿下台覧）の額の右上に「書庫（二階）」、同中央下部分に「庫（二階）」の記載がある。
6. 「修道中学校史」昭和6年7月20日発行 30頁の「藝藩学問所文久慶応頃ノ図」にも「書庫（二階）」、同中央下部分に「庫（二階）」の記載がある。
7. 「竹之丸御屋鋪惣図」平面図の学問所との北側境界部分にある御蔵には「学問所受 御蔵」

と記されている。ただし、学問所の「門」は「問」の間違ひであると思われる。（調査の結果）

8. 学問所の蔵であったかどうかについては、2間×3間の蔵は加藤早苗氏の調査においても学問所にしかない。
9. 断定資料はありませんが古図面などの状況証拠から判断して学問所の蔵であった可能性は極めて高いといえます。ほぼ断定してもかまわないと思います。確率的に言えば90%～95%あるといってもよいと考えます。（広島大学 三浦正幸教授）

この蔵が修道に対してもつ意義を私は次のように考えます。

1. この蔵について、修道関係者に話を聞いて欲しいと加藤さんが言われたということは、修道が藩校の流れを汲んでいるという受け止めが世間では一般的になされている。
2. 学問所の蔵を修道が譲り受けることは、藩校の流れを汲んでいることへの自覚と誇りを改めて確認する機会となる。
3. この蔵の移築を機として、改めて建学の精神に立ち帰り、将来に向かって世に有為な人材を育成していくようにいっそう励む。少し長くなりましたが、以上を前置きとして本題に入りたいと思います。

さて、本日、「修道はなぜ藩校の流れを汲んでいると言えるのか」というお話をいたしますが、いまさら何故なのかと思われるかも知れません。しかし、このことはしっかりと確認しておくことが必要であると修道学園史研究会の活動が続いている中で感じるようになってまいりました。

と申しますのは、次のような方々がおられることを知っているからであります。

1. 「藩校の流れを汲んでいる」というのは、「こじつけ」ではないのかという人
2. また、藩校の流れを汲んでいるということをご否定はしないが、十分には納得のいかない人
3. 卒業生の中にも、藩校の流れを汲んでいるということは、かねてから聞いてはいるが、なぜ藩校の流れを受け継いでいるのかについて、はっきりとは知らないという人

これらに関して、これまで修道祭の時に話をさせていただいた中で触れてはきていますが、特にこの点に絞ってお話するのは初めてあります。修道の学校説明会を始め、いろいろなところで、修道が藩校の流れを汲んでいるのだと言ってくる。藩校を学校創立の源としているということは、私学修道の存在の根幹に関わることだと思います。したがって、このことに関してしっかりとした認識を持つことは、極めて大切なことであると思います。

修道が藩校の流れを汲むということについてお話をする時、大事な人として、二人の人物を挙げなければなりません。

一人は、広島藩12代藩主、つまり広島藩最後の藩主であった浅野長勳公、そしてもう一人は十竹山田養吉先生であります。

なぜこの二人が大事であるのかは、これからお話ししていく中で確認していきたいと思えます。

「藩校の流れを汲む」ということについて、腑に落ちないと言われる方がおられるのも無理からぬところがあります。

藩校「修道館」は1871年（明治4年）廃藩置県の実施とともに廃止されます。その「修道館」のあった跡を1872年（明治5年）に土井百穀という人が買い取り、「遷喬舎」という塾を設立します。この遷喬舎が1874年（明治7年）には廃止になります。このあとに、官立英語学校が開かれ、さらに広島県が英語学校を引き継ぎます。ついだ普通科教育を行う県立中学校へと展開されるのです。ここまでの段階では、藩校の流れは途絶えてしまったということになります。

しかし、広島藩最後の藩主浅野長勳公が1878年（明治11年）6月、広島上流町の泉邸内に私財を投じて私立「浅野学校」を設立されました。長勳公は当時の広島における教育機関が内容・施設ともに不十分で、市民の教育への熱望にこたえていないという認識をもっておられたと言われております。そこで、藩校・修道館の精神を受け継ぐ学校を開設されたわけでありです。修道館への強い思いが伺われます。新しく学校を建てられて「温知館」と名づけられました。この時、修道館が閉鎖されてすでに7年が経過しております。浅野長勳

公が、この「浅野学校」開設されたということが大切なところでありです。修道が藩校の流れを汲んでいるという大切なポイントになってきます。

浅野学校は、校長に幕末に藩の執政であった石井櫟堂（雄之介）を起用しました。旧藩主の設立した学校としての誇りもあって熱心な教育がなされ、在籍生徒数は常に120から130人という状況であったといわれております。

設立3年目の1881年（明治14年）5月、浅野長勳公は、浅野学校を時代に相応しい学校にするために学制改革に着手されます。8月には石井櫟堂校長以下教職員の職を解き、海軍兵学校の教官であった山田養吉先生を抜擢して校長に迎え、学校運営の全てを任せられます。

藩校「修道館」の精神を受け継ぎたいという思いで、「浅野学校」を興された浅野長勳公が、この旧藩校の教授、山田養吉先生を抜擢されたということが修道の歴史を考える時、最も重要なポイントであります。

なぜ、浅野長勳公は、山田養吉先生を抜擢されたのでしょうか。

一口で言うと、先生が藩において、今為すべき事は、「人材の育成」であると藩主に建言し続けてこられたからだと言えるでしょう。

山田養吉先生は、30歳・1862年（文久2年）の頃、船越八左衛門、田口太郎、川合三十郎、星野文平ら藩の志士たちと世の中に尊王攘夷の思想が広まっていくなかで、藩の将来について真剣に熱い論議を交わしていました。藩主浅野長訓公が上洛されるに際して、尊攘に藩主の思いを向けるように脱藩してでも上洛して助けよう同志で意を決していました。このことを相談された上役が、藩を思う若い志士たちの思いを善しとして、死罪にも当たる脱藩を回避させて、執政辻将曹の随行者として上洛するように取り計らいました。上洛を果たした志士たちは、先生を始め、それぞれ藩主を助けて働きました。先生は、藩主に国家の今なすべきは人材の育成であると建言されました。浅野長訓公は、藩政の改革を目指されておりましたので、国に帰ると、先生に藩政府において政治上機密性の高い用達所詰という要職に就くように命じられました。しかし、先生はこれを辞退されま

す。そして学問所付の職に復されたのでした。

このことについてお配りしております資料をご覧いただきたいと思います。資料2です。

「人材育成への思い」という項目を挙げております。

次に「待賓説」です。(資料3) もう一つは、(資料4) 海軍兵学校を辞するに当たって作られた漢詩です。いずれも人材育成への山田十竹先生の並々ならぬ思いが込められています。

旧藩校時代の先生は、山田養吉先生のほかにも優れた方はおられました。例えば、岩本元行氏もその一人です。藩校の先生を山田養吉先生と一緒に務められ、修道館が閉鎖されて後、先に申し上げた遷喬舎の先生をされています。そしてこの遷喬舎が1874年(明治7年)に廃止されますが、翌1875年(明治8年)から県立師範学校の校長に就任されています。そうした方がおられる中で、海軍兵学校の教官となっておられた山田養吉先生を浅野長勳公が特に抜擢されたということの重さを感じるのであります。

つまり、藩校の精神を受け継いだ学校の指導者は山田養吉先生を措いて他にいないと確信されていたのだと思います。

明治14年11月、山田養吉先生を浅野学校に迎えるにあたり、学校名を「修道館」の「修道」の二字を引き継いで「修道学校」と改められました。藩校の精神を継承した学校をつくりたいという長勳公の強い思いが感じられます。先生が藩校「修道館」の精神を受け継ぐべき人として「修道学校」の校長になられたことは、先生を通して、これ以後現在にいたる修道に藩校の精神が受け継がれたのだと思います。それとともに1725年(享保10年)開設の講学所に始まる藩校の歴史につながるのだということが出来るのだと思うのです。

そして、もう一つ大切なこと、あるいは最も大切なことがあります。

それは、1886年(明治19年)3月、突如「修道学校」に重大な危機が訪れたことです。それまで資金的な援助をし、物心両面にわたって積極的に修道学校の経営を支えてこられた浅野家が経営から手をひかれるという事態に立ち至ります。その

理由は、1877年(明治10年)広島県が設立した広島中学校が1886年(明治19年)に広島尋常中学校と改称されます。修道学校の存在が県立の広島尋常中学校にとって支障となるということでした。このことを、山田養吉先生が亡くなられ際、後事を託されて修道中学校の校長になった水山烈先生が「修道中学校創立10周年の記念式」(1915年・大正4年)の式辞の中で述べられています。

この時期、国の政策として全国の公立の学校を整備して、教育の推進をしていましたので、旧藩主として影響力のあつた長勳公は公立学校の設置・運営の推進を図る立場におられた訳で、私的な学校である「修道学校」の経営から退かねばならなかったのです。

これは、「修道学校」にとってまさに存続の危機でありました。ここで先生が修道学校を存続させる事は困難であると判断し、継続を断念されていたならば、この時点で藩校の流れを汲んでいるという修道中学校・修道高等学校は現在、存在することはありませんでした。



しかし、修道学校をこのまま閉鎖してしまうことは先生にとって忍びがたいことでありました。「人材育成」という思いを断ち難く、独力で学校を存続しようと決断されたのです。先生は、長勳公から「修道校」の扁額、第七代広島藩主浅野長晟公直筆の「至聖先師孔子神位」の木主、そして教材・教具をいただいて、八丁堀の自宅で修道学校を継承されたのです。

ここからが修道が私学としての道を歩み始める

のです。修道開祖の恩人といわれる所以がここに
あります。

この後、1897年(明治30年)ごろになって、また
もや修道学校の存亡の危機が訪れます。苦難の
道は続き、今日に至るまでには、幾たびもの危機
が襲いました。それらのお話は、また次の機会に
譲りたいと思います。

本日のお話は、藩校の精神を受け継いだ学校を
つくろうと強い思いをもたれた浅野長勲公の存在、
そして何より十竹山田養吉先生がおられなければ、
藩校の流れを汲んだ現在の修道は存在し得なかつ
たということに尽きる訳であります。

ご静聴ありがとうございました。

(2010. 10. 31)

資料1

藩校からの流れ

講学所 → 講学館 → 学問所 → 修道館 → 私
立浅野学校・温知館 → 修道学校
(山田養吉が引き継ぐ)

→ 修道学校 → 私立修道中学校 → 新制修道中学
校・修道高等学校

講学所

1725(享保10)年文武両道の奨励するために白
島の稽古場内に「講学所」を開設

5代藩主浅野吉長 広島藩における組織的な
藩士教育の開始

侍講の常番を解き寺田臨川を教育担当とする。

講学館

1734(享保19)年に「講学所」を「講学館」と
改称

1743(寛保3)年10月 白島稽古屋敷が廃止さ
れ、講学館も閉鎖された。

理由「御省略」(経費節減)

学問所

1782(天明2)年 7代藩主浅野重晟「学問
所」創設 民間からも頼 春水 香川南浜
らを登用

重晟の筆になる 木主「至聖先師孔子神位」

修道館

1870(明治3)年「学問所」を広島城内八丁馬
場に移して「修道館」と改称

「修道」の命名の由来 「中庸」の中のことは
「率性之謂道 修道之謂教」による。

「率性之謂道 修道之謂教」→ (大意)
われわれの本性(ほんせい)は天賦のもので
ある。その生まれつき与えられた本性に従っ
て生きていくのが人として歩むべき道である。
しかし、多くの人が実際に行うところは必ず
しもこの道に一致しない。この道を実際に行
えるようにしたものが教えである。

1871(明治4)年 廃藩置県とともに「修道館」
廃止

私立浅野学校

1878(明治11)年 12代藩主浅野長勲、泉邸内
に私財を投じて「私立浅野校」の開設を計画
「修道館」の継承をめざす 校舎の新築後は
「温知館」と名づけた

校長 石井櫟堂 教職員6名 生徒120~130名
くらい

1881(明治14)5月 浅野学校の学制改革をめ
ざす

8月 校長以下教職員を免じ、翌9月には従来
の学制を改め、普通学をも行うこととする。そ
して旧藩学の教授 山田養吉を抜擢、任用 校
務一切を委任(海軍兵学校の職を辞す)
長勲から養吉に与えた教学の指針

一、道徳ヲ修ムルヲ以テ本校ノ主義トスベキ
事

一、生徒の品行ヲ正スベキ事

(以下略)

明治十四年九月二十二日 長勲

山田養吉殿

11月 校名を「修道学校」と改める

1886(明治19)年 浅野家「修道学校」の経営
廃止

山田養吉、八丁堀の自邸に場所を移して独力で
「修道学校」を引き継ぎ、経営を始める

「修道校」の額及び「至聖先師孔子神位」の木
主ほか器物・書籍などの下付をうける

私学の道へ

私学修道のあゆみ

1900(明治33)年「修道学校拡張趣意書」を作成し、水山烈ら日夜奔走

12月 普通学の教授を廃して、漢学のみ教授によって学校の持続を図る。

12月5日「修道夜学校」を始める。(起死回生の策として)

1901(明治34)8月26日 山田養吉 逝去 後事を水山烈に託す

《近代学校制度の発足》

私立修道中学校

1905(明治38)年4月28日「私立修道中学校」が認可される。

新制修道中学校設置

1947(昭和22)4月1日

新制修道高等学校設置

1948(昭和23)5月3日

現在に至る

資料2 その1

人材育成への思い

1863(文久3)年広島藩執政辻将曹従い、上洛したとき山田養吉先生は諸藩士との間を斡旋し、活動されながら藩主淺野長訓公に尊王の大義を説かれていた。公は藩政の改革をしたいとの考えがあり、帰国後、先生に藩政の要職である用達所詰を命じられたが、先生は、このような時代の国家の急務は、人材の育成であると上申して辞退され、学問所の仕事に復帰された。後年、1863(文久3)年のことについて「与阪谷寺田二公書」(十竹軒遺稿)という文章に次のように述べている。

1.【原文】「浩年十六 為句読師員 乃意国家之事 非人材則竟不举矣 除人材而紛々焉 徒費力耳 我材鈍質愚 不為廟堂之用 仮雖為用 一人為之用 不如衆人為之用 我須成衆材以植国本也 於是上疏言興塾者数 後□□公命浩為政府吏 曰 使渠一變政府之弊 浩愧縮飲泣 雖知命之不可不以奉 亦非其志 則辭而復學職…」

【書き下し】「浩、年十六。句読師の員たり。乃ち国家の事を意(おも)ふ。人材に非ざれば則ち竟(つい)に挙げず。人材を除すれば、紛々たり。徒(いたずら)に力を費やすのみ。我材は鈍、

質は愚なり。廟堂の用を為さず。仮に用を為すと雖も一人の為すの用、衆人の為すの用に如かず。我須く衆材を成し、以て国の本を植うるべきなり。是に於いて上疏し塾を興すを言うは、数(しばしば)なり。後□□公浩に政府の吏と為るを命じて曰く、渠をして政府の弊を一變せしめよと。浩愧縮して飲泣す。命の奉ざるを以てせざるは不可なるを知ると雖も、亦其の志に非ざれば則ち辞して学職に復す…」

【口語訳】 浩、十六歳。句読師の一員であった。そして、国家の事の将来について考える。才能のある人物でなければ、結局は取り立てることはない。有為な人材がいなくなるとあれこれと意見が入り乱れ事がまとまらず、むなしい努力をするだけである。私は才能が優れてはおらず、本来おろかなのである。天下の大政に加わるには何の役にも立たぬ。仮に役立つところがあるとしても多くの人間の働きには及ばないのだ。私はぜひとも多くの人材を育てあげ、優れた人材をもって国の土台を築かねばならないのである。そこで、公に意見書を差し上げて、(人材を育成するための)学塾を興すことを申し上げること、しばしばなのである。後に、□□公が浩に政府の役人であることを命じておっしゃるには、かれ(浩)に政府の弊害を改めさせよ、と。浩、はずかしくて身も縮み声をのんで泣くばかりである。公のご命令はおしいただいてお受けすべきであるとは、知っているけれども、自分の志すところではないので、それをお断りして学職に復帰したのである。」

資料2 その2

2.【原文】「於是拉洋学生遊江戸 使諸生読洋書 浩則尚講旧学 入若山古賀二翁門 居三年帰国 復言興塾 既而擢教授員 愈奮以為我不取一 国子弟尽為人材則不措 …… 夫人材国之正脈 莫人材国將斃 ……」

【書き下し】 是に於て洋学生を拉して江戸に遊ぶ。諸生をして洋書を学ばしむ。浩則ち尚旧学を講ず。若山・古賀二翁の門に入る。居ること三年にして帰国す。復た塾を興すを言ふ。既にして教

授の員に擢(えら)ばる。愈(いよいよ)奮(い)ひ我(われ)以為(おも)へらく、我(われ)一(ひと)國(くに)の子弟(しやくてい)人材(じんざい)たるを尽(つく)す(ことごと)く取(と)らざれば 則(すなは)ち措(お)かず。……

夫(こ)れ人材(じんざい)は國(くに)の正脈(しょうみやく)なり。人材(じんざい)莫(な)くば國(くに)將(しょう)に斃(た)おれん。……」

【口語訳】 そこで洋学生をつれて江戸に遊学した。学生たちに洋書を学ばせるためである。そして、浩はなお古い学問(漢学)を講じている。若山・古賀の二翁の門下で学ぼうとしている。江戸に居ること三年で、國に帰る。また、学塾を起ち上げることを進言する。すでに学問所の教授の列に抜擢されている。それでいよいよ奮起して私の思うことは、我が藩の優秀な才能を持っている人物をすべて用いることをしなければ、そのままにはしておけないのだ。…そもそも人材は國を支える根幹なのである。もし、人材がいなければ國は衰退してしまうであろう。

資料 3

待賓説

明治戊辰、余自東京將帰郷、過西京、時發機隊神機隊皆在西京、勤余從事軍旅、余爲此説而退

【大意】

明治元年、自分は東京より國へまさに帰ろうとしていた。その時、京都に立ち寄った。ちょうど、発機隊・神機隊が京都に駐屯していた。隊の者は、自分に一緒に戦争に行くようにと勧めた。しかし、自分はこの説(「待賓説」)をつくり、戦には加わらず、退いたのである。

【待賓説原文】

有大賓焉。主人禮敬備至。設帷帳。具聲樂。盃盤雜錯。肴核續紛。號召其子弟家人曰。賓事方急。曷擲汝常職。而執我之賓事。厨吏聞之。亦擲其刀而周旋於盃盤之間。行酒侑肴。既而盃盤傾焉。無繼者。肴核盡焉。無調者。主人愕然叱厨吏。使復執其刀。賓不喜而去。方今外側從事軍旅。而忘國本者。或有類此。爲待賓説

【書き下し】 「大賓(たいひん)有り、主人礼敬して至るに備ふ。帷帳を設(しつら)へ、声樂を具す。盃盤雜錯す。肴核續紛(こうかくひんぶ

ん)たり。號して其の子弟を召して家人曰く、曷(なん)ぞ汝の常職を擲(なげう)たんや。而して、我が賓事を執(と)れと。厨吏(ちゅうり)これを聞き、其の刀を擲(なげう)つて盃盤の間に周旋し、酒を行(すす)め、肴を侑(すす)む。既にして盃盤傾く。繼ぐ者なし。肴核尽く。調する者無し。主人愕然として厨吏を叱し、また其の刀を執らしむ。賓喜ばずして去る。方今、外は則ち軍旅に従事し、内國本を忘るる者、あるいは此れに類す。待賓説を爲す。」

【大意】 大事なお客が大勢ある。主人は丁重にもてなしをしようとお客のこられるのに準備をする。幕を張り、帳(とばり)をおろし、会場を設(しつら)え、音楽の準備をする。宴が始まり盃が入り乱れて交わされ、ご馳走がこちらこちら飛び舞うようである。そこで主人は使用人たちを大声で呼び集め、どうしておまえたちのいつもやっている仕事を放り出さないのか。それを放り出してわたしの客のもてなしをしなさい。料理人は主人のこの言葉を聞いて持っている包丁を投げ出して、盃の盛んに交わされている宴席の中に入ってその場を取り持ち、酒を勧めたり、ご馳走をすすめたりする。そうしているうちにすでに酒がつきてしまった。しかし誰も追加してくるものはない。ご馳走も尽きてしまった。しかし誰も料理しない。主人はびっくりして、料理人を叱って再び包丁をもって料理するようにさせる。しかしその時はもう客たちは無然として帰っていった。

いま藩は外部に向かっては戦争に携わり、内においては國の根本(人材の育成)を忘れている。これは或いは今述べた話に類するではないか。そのように考え、この「待賓説」を記したのである。

(私には人材育成という本来の仕事があります。いまあなた方の勧めに従って軍隊に加わって戦をするということになれば、料理人が本来の仕事放って客の接待をするのと同じである。わたしはあなた方の勧めには従いません。)

資料 4

■海軍兵学校の友人に宛てた手紙

此の度のこの事、公の爲、私の爲取り計らひ下さ

れ、萬謝仕り候。就いては、篤と思慮仕り候へども、鐵鑄の心腸挽回すべく無く存じ候に付、この上は御周旋下され、早く御放還之あり候様願ひ奉り候。

【大意】この度は浅野公のため、わたしのためにいろいろとご配慮くださりまして、厚く感謝申し上げます。このうえは、(学校との間を)おとりなしくださって、早くわたくしが国に帰りますことをお許しくくださいますようお願い申し上げます。

■海軍兵学校を辞するに当たって心境を述べた漢詩

男児有志未為灰。一諾千金不可回。願得放鳥賜閑暇。為郷鬻国育人材。

【書き下し】男児志有りて未だ灰と為らず。一諾千金にして回(めぐ)らすべからず。願わくは放鳥閑暇を賜うを得て、郷鬻、国の爲に人材を育てんと。

【口語訳】わたしは男子として人材育成という志をもっており、未だこの志を捨ててはおりません。したがって、浅野公の要請を一旦承諾しましたうえは、この約束をどうしても変えることはできません。どうかわたしにお暇をお与えください。郷里の学校、国のために立派な人材を育成したいと思ひます。

参考 解体された蔵 (日本通運の倉庫に保管してあったのを撮影したもの)



礎石 かなりの数があった



蔵の窓



梶の木の大きな梁



菊間瓦といわれるもの

特別寄稿

修 寿 会 報 告

木 村 正 勝 (高13回)

修道中学・高等学校の退職教職員の集まりである「修寿会」(会長・河野富士雄、会員82名)の第24回総会・懇親会が平成22年10月9日(土)、鯉城会館(広島県民文化センター内)で開かれ、17名の参加がありました。

開会にあたって亡くなられた恩師諸先輩に黙祷を捧げました。

引き続きの懇親会では、特に長く続いた猛暑がこれまでになく厳しいもので、どのようにしのいで、ようやくの秋の気配に生き返ったことかというような話から始まりました。出席の皆さんが、それぞれ近況を報告されるなかからは健康面のお

話、平生心がけておられることなど、やはり勤務した修道でのことが中心となりますが、退職後の生活についてはおのおの個性あるスタイルで過ごされていることが伝わってきました。短時間ではありましたが、和やかなひとときを楽しむことができました。

なお、今年度の新会員は、平山(鍋山)和子さん、渡辺宗昭さん、吉田 学さんです。

そして、恒例の校歌を斉唱し、次回(平成23年10月8日《第2土曜日》)再会を期し、修道学園のますますの発展と会員の健勝を祈念し、万歳三唱して、お開きとなりました。



木	原	仲	田	壺	藤	北	大	吉	中	街
村	本	井	中(博)	岐	沢	川	東	崎	山	道
竹		畠		小		河		保		田
永				田		野		沢		中(正)

ねんりんピック石川大会に出場して (サッカーが生涯スポーツ)

林 孝 治 (高2回・文)
大 内 晟 (高11回・写真)

第23回全国健康福祉祭いしかわ大会は10月9日(土)より12日(火)まで、会場を金沢市、七尾市を中心として、行なわれました。総合開会式は、金沢市の石川県西部緑地公園陸上競技場に常陸宮殿下・同妃殿下を、お迎えして盛大に開催されました。

歓迎アトラクションとして、石川県の保育園児から高齢者まで、大勢の地元の方々の伝統の、お祭りなど、盛り沢山の演技を見せていただきました。

『光る汗 輝く いしかわ 笑顔の輪』をテーマに健康関連イベントとして、文化交流大会・ふれあいスポーツ交流大会・健康づくり教室・ふれあいニュースポーツ・健康フェアなどがとり行なわれました。

総合開会式の後、各種目別に開始式が行われました。サッカーは石川県地場産業振興センターで歓迎アトラクションとして中学校吹奏部による演奏や金沢市の指定文化財である『加賀宝生』の後継者のための子供塾の披露で迎えていただきました。

修道OBの出場者は東京シニア60の藤田 勉(13回)・多摩ロイヤルズの豊田 隆(18回)・広島県の大内 晟・広島市の藪 正悟(17回)と林 孝治、それに三重県の宇根茂雄(9回)の6名でした。

戦績は次の通りですが、特記すべきは、なぜか「広島」と「東京」の組み合わせになることが多く、鹿児島の大会で4-1と東京に大敗しましたが、今回も再び対戦することになりました。その時、「怪物くん」の藤田を紹介しました。今回もひどい対戦になると覚悟をしておりました。ところが、彼が左膝を負傷して、ハーフしか出場していませんでした。

彼にとっては、まことに残念でしたが、我軍にしてみれば幸いでした。対広島戦で欠場となりました。それでも、東京に負けはしないが、勝つことはできませんでした。

広島市1-1東京都 広島市1-1滋賀県
広島市1-0静岡

東京都(藤田)は得点差で1位(金メダル)、広島市は2位(銀)となりました。

多摩ロイヤルズ(豊田)の戦績は

多摩0-2秋田県 多摩0-3三重県
多摩0-5浜松市

残念ながら、何故か、得点0、失点10、従って順位は4位、ドウニモならない、(銅)にもならない戦績で、お土産は次回のことになりました。

豊田は日本サッカー協会C級コーチで、「あきる野市立西中学校の指導講師」・「同児童館サッカー教室講師」そして「NPO日の出スポーツと文化の森構想を推進する会」の理事としても活躍されております。

広島県(大内)の戦績は

広島県1-0山形県 広島県1-2群馬県
広島県3-0奈良県

2勝1敗、得点5、失点2となり、2位(銀)の成績でした。(金)は3勝0敗の群馬県でした。

三重県(宇根)の戦績は

三重県0-1秋田県 三重県0-2浜松市
三重県3-0多摩ロイヤルズ

豊田様の多摩ロイヤルズに3点とって勝利し、ドウニカ、(銅メダル)を手にして四日市に帰ることができました。

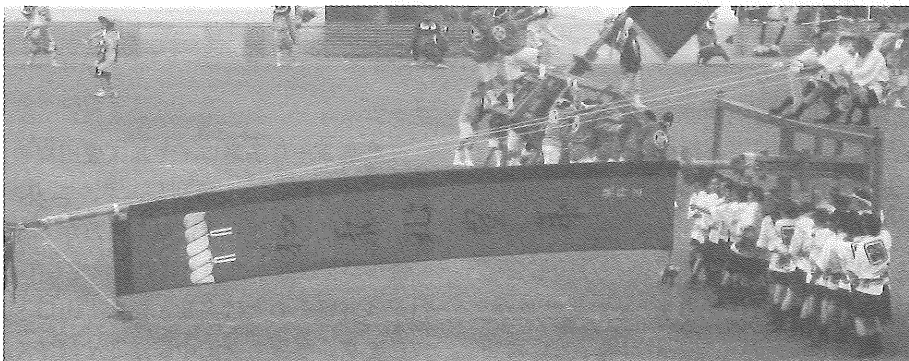
来年23年は熊本県が主催県と決定しております。24年は宮城その次は高知・栃木・山口・長崎とつづきます。今後も全国の修道 Boy の多くの出場を希望しております。



写真は左より
豊田 大内 藤田 林 簾 宇根（敬称略）



江戸時代から伝わる火消し加賀とびの伝統芸「はしご登り」



お熊甲祭の杵旗を地面すれすれに倒すダイナミックな技を披露

わが心の自叙伝

竹本成徳(高2回)

竹本成徳(たけもと・しげのり)氏の略歴

元コープこうべ理事長。1931年広島市生まれ。44年修道中学校入学。45年広島市役所南側植込みで被爆。54年同志社大学卒業。同大大学院に進学。同大学生協専務理事に就任。

57年神戸生活協同組合に就職。神戸生協と灘生協の合併後、専務理事を経て89年灘神戸生協(現・コープこうべ)組合理事。93年から2001年までコープこうべ理事長。

阪神・淡路大震災後には陣頭指揮を執る。93年から2003年まで日本生活協同組合連合会会長。03年勲二等瑞宝章受章。神戸市在住。

「わが心の自叙伝」は、神戸新聞に全30回(2010年3月21日から10月10日までの毎週日曜日)にわたって連載されたものです。竹本氏は、この自叙伝を書かれるにあたって次のように述べられています。「正直に言って、大変とまどいました。「わが心の自叙伝」と聞いて、私には不似合いなテーマであると考えたからです。できることなら

辞退したい。それにしても、編集担当者と一度お目にかかって、よくお聞きした上でのごことにしようとお面会を要請し、お会いしました。先方は私がヒロシマの原爆で奇跡的に生き残り、今では爆心地より1キロ以内では、百人に一人しか生存していない被爆者の一人であり、その上、阪神淡路大震災でも大きな試練をくぐり抜け、二度の地獄を見たという希有の体験の持ち主であること。そして、生協一筋の人生をこの地、神戸で歩んできた事などを、依頼の理由に挙げられました。こう説明されると、逃げるわけにはいなくなりました。以下略」

この度、ご同期の中村和彦氏より是非ご紹介いただきたいとのご依頼を受けて、特に修道中学校入学からご卒業までの「戦争末期」「8月6日」「炎の外へ」「友の記憶」「姉の介抱」「姉の死」「青春時代」「被爆を語る」の8編を掲載させていただくことといたしました。

(事務局)

わが心の自叙伝

竹幸 敏徳

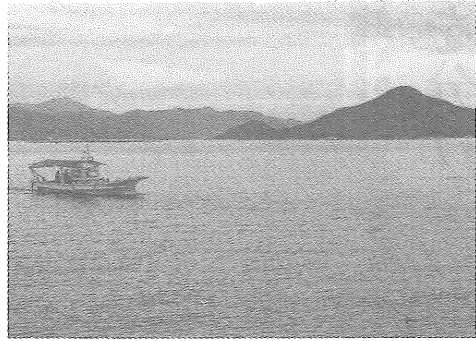
▷ 4

1944(昭和19)年4月、私立修道中学校に入学した。私のまに広島市の郊外に住む生徒も普通学は許されず、体を鍛えるため、片道3分の徒歩通学であった。引継の4年生や5年生の先輩は、きりりと歩いて大のようだったが、その上級生次第に減っていった。軍需工場に派遣されたのだ。入学当時は「敵性語」と言われた英語の授業もあり、特設、普通のカリキュラムと変わることはないうまに思えたが、軍人勲章や教練教官といった資格にも目を通す時代へと進んでいった。戦局の逼迫に伴って、敵機の

戦争末期

飛来が増えきた。米軍はゾアムやテリノなど太平洋上に浮かぶ島を基地とし、B29という長距離を飛ぶ戦略爆撃機によって本州撃つことができるようになっていた。終戦を迎える45年には、3月10日の東京大空襲をはじめ、名古屋、大阪、神戸の街が焼夷弾で焼き尽くされ、多くの死者を出した。一方、高度7千〜8千の上空で主エンジンが爆発するものは度々あったが、爆撃はなかった。それが、私にとっては不思議でなかった。

ある朝、目を覚ますとすでに西部隊軍管区司令部発表、本白未明、土佐海軍方面海上に敵機現れる。続いて、敵機は佐渡を北上し、四国を横断、伊予灘から広島湾を向かって航行中、エーリアの放送流れた。海岸から近い我が家からは、向かって左に能登島、似島、その後ろに海軍兵学校のある土田島、そして右に釜蓋の宮崎、広島湾が一望できた。その間、島の間から、敵の艦載機が、7機編隊で次から次へとまてくる。街中のサインは二音に、固まりが、広島の市街地にかか



現在は平和な風景が広がる広島湾；右は、その形から「安芸小富士」とも呼ばれる似島=広島市西区

意味深な紙片見つける

番機から次々に降下して真の軍港に突っ込んでいく。爆弾を投下し終える、急上昇して南に帰る。軍港の艦船からの迎撃はもろろのど、周りの島々に構築された要塞から、一斉に発せられた対空砲火で見守る中、空は黒い煙霧で包まれる。その中に敵機が突っ込んでいく。ほとんども命中しないが、時々火の玉となって散っていく。任務を果たした敵機は、南の海上で待つ空母母帰っていった。それは、戦争映画さながらの情景であった。私達は少年のころからひきまうで臆病者の米兵と教え込まれていたが、こうして空襲を見てみると、それは真に恐怖を見つけた。戦争は、そのまうに危険からの逃げ場を写すものではない。人間は、いざ命をかけた場面(直面)と、すこい意志(力を奮)起して、勇敢で強くなるもの(内面)だ。これは本義理な心理だろうか。終戦の年の暮から、こんな光景が続いた。あやう、潮干狩をしていたところ、変なものを発見した。手のひらの2倍くらいの大きさの紙に日本地図が描かれ、その真ん中、広島が切り抜かれた。そこを「E」と書かれていた。その紙は、干潟のあちこちで散らばっていた。その場では「どうせ、アメリカが不安を醸成分をかき立てるためにまいた宣伝だ」と感じ、それ以上の深読みはしなかった。今にすれば、原爆投下地帯としての広島を暗示するものではなかったらうか、とも考える。こいつ、時は一刻一刻と、その目近づいていった。(竹もと・じのりE元コ177)八理事長

神戸新聞
2010年4月11日(日)

わが心の自叙伝

竹幸 敬徳

.....▷9

原爆投下から10日経たないうちの朝5時、父は徹夜の勤務から帰ってきた。台所の板の間、あぐらをかき、無言のまま一点を見つめていた。

突然、正面直したかと思うと、父は大きな声で私を呼び、「成徳、真の雄行ってマトをもどいて来て命じた。父はマトを渡すと、包丁切り、きもて急須に挿した。そして、椅子のお、マトの好きなんだからのおと独り言をいながら、姉の枕元行って飲ませた。「おさん、ありがと、ありがと、おしじじ、姉はじを鳴りて飲んだ。小原を得たので、父はまた小

姉の死

学校に行った。午前9時ごろ、なつ姉が「お父さん、お父さん」と言い始めた。この場にはない父親の横顔は、意識がもうとじているのではと思っただ。続いて「もう少ししたら、おさんが迎えに来てくれる。おさん、先ほど不幸な事故で死んだ娘が冷平、冷平、もし、わけて代わって死んでやるもんなら、死んでやるのじじい」泣きはじめた。私も「おさん、かかれ、おれは絶対に海軍の飛行機に乗って、アメリカに飛び出さる。私から姉に贈る。最初で最後の言葉となった。午前9時40分、姉は静かに逝った。棺桶はない。納屋から板切れを持ち出し、にわかじじい天の棺に姉を納め、みんな山に行つて穴を掘り、茶屋好した。父は無言でツチを掘り、火をつけた。姉はかわいさだ。私は無念に思っていた。だが、20歳のわがを自ら焼かすほどのなら、一瞬間の気持ちはどうなるか。目か子を待つて思う。

最後のトマト「おいしい」



広島市内の法興寺で行われた修道中学校の原爆死没者の慰霊式。筆者は最前列右端で、生徒代表として弔辞を読んだ(1946年ごろ)

原爆投下から10日経たったころ、広島市の街は出た。川面はまだ大船が落ちたまま埋め尽くされていた。橋の上からその光景を眺めていた。隣にいた夫婦が私に言った。「あの日から娘を懐けてあつた所を狭く焼かれたの、出なな」

そしておさんが川の中に入り、うづせになつている遺体を、わが子はないだろうか。次々にひっくり返しておられた。だが遺体は腐敗が進み、スルトと崩れてい、あつたのがこの世の光景か、むい、残酷悲惨。私は、子を思ふ親の愛と情念に心を動かされた。親にかたくなとほでさないと思つた。

街の各所や寺の境内に死体が山のように積み上げられ、防火用水は最後の水を使った。勢の人で埋まり、馬も牛も目をむき、膨れどっかりと倒れていた。市電は停て転がり、街はがれきの山、見舞す隣の焦土化し、人間の煙けきる異様なにおい匂まれていた。ピロシマは破壊されたのでなく、焼かれたの、私には一発の原子爆弾によって消されたものと思つてい。終戦を迎え1945年、昭和20年だけで、広島原爆のため約14万人が亡くなった。今日、平和記念公園の慰霊碑は犠牲者26万0045人の名簿が納められている。

「安らぎに願つて下さい、過ちは、繰返さませぬが」

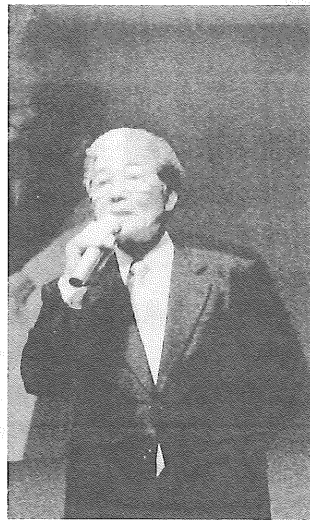
慰霊碑に刻まれた文面だ。これは、誰が誰に残した言葉だろうか。私は、人間が人類、そして一人ひとりに向けさせた言葉を繰り返さなうと、(たけもと)しげのり(トコ)トコ(理直)

わが心の自叙伝

竹幸 敏徳

.....▷30

神戸新聞
2010年10月10日(日)



全国の生協組合員が参加した「ピースアクション in ヒロシマ」で被爆体験を語る筆者=2010年8月5日、広島市内

昨年(1)に続いて10月6日、ヒロシマ行った。三つの目的があった。原爆投下の前日、全国の生協から集まった組合員親子千人に被爆体験を語り、国連事務長・潘基文氏も参加する「原爆犠牲者慰霊並びに平和祈念式」への公式参加。地元兵庫のサテライト企画した「兵庫に在りある被爆者の65年前のヒロシマ」をテーマにした取材であった。

被爆を語る

にも未来への種をまき、明るい国際色が会場を包んだ。米大統領オバマ氏が「核兵器のない世界を目指すと宣言して、世界の潮流は大きく動き、核廃絶の悲願が実現する可能性を私たちに示したのではなからうか。

「電話聞いて色々な思いが胸の奥にたがった。思わぬ方々から電話や手紙をいただきました。正直なところ、豊田タウンにたがってきまして不安もあつたが、緊張感で乗り切った。被爆体験を語り、いっしょに私を励まし、応援してくれたのは多くのもたちであった。昨年未届いた、ある年生がら手紙を紹介したい。神戸市立桜が丘小学校がのお礼の手紙の部だ。

「電話聞いて色々な思いが胸の奥にたがった。思わぬ方々から電話や手紙をいただきました。正直なところ、豊田タウンにたがってきまして不安もあつたが、緊張感で乗り切った。被爆体験を語り、いっしょに私を励まし、応援してくれたのは多くのもたちであった。昨年未届いた、ある年生がら手紙を紹介したい。神戸市立桜が丘小学校がのお礼の手紙の部だ。

「電話聞いて色々な思いが胸の奥にたがった。思わぬ方々から電話や手紙をいただきました。正直なところ、豊田タウンにたがってきまして不安もあつたが、緊張感で乗り切った。被爆体験を語り、いっしょに私を励まし、応援してくれたのは多くのもたちであった。昨年未届いた、ある年生がら手紙を紹介したい。神戸市立桜が丘小学校がのお礼の手紙の部だ。

「電話聞いて色々な思いが胸の奥にたがった。思わぬ方々から電話や手紙をいただきました。正直なところ、豊田タウンにたがってきまして不安もあつたが、緊張感で乗り切った。被爆体験を語り、いっしょに私を励まし、応援してくれたのは多くのもたちであった。昨年未届いた、ある年生がら手紙を紹介したい。神戸市立桜が丘小学校がのお礼の手紙の部だ。

「電話聞いて色々な思いが胸の奥にたがった。思わぬ方々から電話や手紙をいただきました。正直なところ、豊田タウンにたがってきまして不安もあつたが、緊張感で乗り切った。被爆体験を語り、いっしょに私を励まし、応援してくれたのは多くのもたちであった。昨年未届いた、ある年生がら手紙を紹介したい。神戸市立桜が丘小学校がのお礼の手紙の部だ。

未来を信じ子どもたちへ

この手紙に読みたいという思いから、「わが心の自叙伝」の再版は実現した。風化という言葉がある。時間の経過で消えられぬ面もあるが、ヒロシマを知ることで人間の痛みがわかる心を持つことが出来る。それが平和の原動力になると思う。子どもたちへ語りかけていこう。すばらしい継承だと思ふ。核廃絶は容易ではない。しかしその可能性に向かって人類は努力すべし。潘氏は被爆地訪問について平和のためにやって来たと言った。次の言葉を結びたい。

未来を信じよう
理念のあとにまっすぐ
人間努力をすすめる
(1)竹幸・敏徳「元」
1777(2)理解(2)

来週からの筆者は、作家の陳麗さんです。

人物往来

音戸温泉湧く興味

～東海大講師、聞き取り調査～

新田 時也氏 (高校34回)

「都会の真ん中に温泉なんて、聞いたことがない」。広島市の歓楽街、薬研堀通りにある「音戸温泉」(中区田中町)を、東海大の新田時也専任講師(46)が29日、聞き取り調査に訪れた。何を調べに来るのか、どんな温泉なのか。記者も同行させてもらい、湯につかった。(山下奈緒子)



音戸温泉について、吉村昌峰さん(高校25回)(右)から話を聞く新田時也さん(高校34回)＝広島市中区田中町の音戸温泉

湧く興味

繁華街 魅力の源は?

平和大通りから薬研堀通りを北へ約80メートル進むと、6階建てのビルに「音戸温泉」の看板が見えた。地下一階はパブ、1階にお好み焼き店、2、3階に温泉施設がある。

新田さんは静岡県在住だが、出身は広島市。日本温泉地域学会役員で、観光振興と温泉について研究してきた。街のど真ん中にある音戸温泉に関心があり、由来や地域との関わりを調べに来た。春の学会で結果を発表するという。

音戸温泉は1959年に故・吉村芳量(よしかず)さんが開業した。現在は長男の昌峰さん(56)が

後を継いでいる。

昌峰さんによると、店名は、出身地の音戸町(現・呉市)にちなんだ。当初は水道水を使った銭湯だった。72年から隣地で採掘を始め、84年、地下850メートルで温泉を掘り当てた。広島は火山がなく温泉が出ないと言われていたが、「マグマに向かって掘れば必ず出てくる」というのが芳量さんの信念。自腹で採掘したため、資金が尽きて中断することも度々。近所の人に「バカじゃないか」と言われながら掘り続けたという。

入浴料は大人400円。一般の銭湯と同じだ。泉質はナトリウム塩化物泉で、筋肉痛や関節痛、疲労回復などに効くという。20度の源泉を沸かす。約270平方メートルの館内には、受付と自動販売機があるくらいで、食事はできない。

新田さんが「もっとサービスしてお金を取らないんですか」と尋ねると、「400円ぐらいが、気を使わんで楽。文句を言う人は来るなど言っている」と昌峰さん。

サービスはないが、「つえをついていた老人が、帰る時につえを忘れた」こともあるという湯を求め、日に150人は集う。午後1時前の開店を待っていた南区の高木猛さん(71)は「この温泉はワシにとって楽」。週に2、3回入りにくるといふ。

客は減少傾向だ。午前8時まで開けていたころは、風呂で寝込む客が多く、「起こすのが大変だった」と昌峰さん。採算が悪いので、昨夏から午前1時までにした。近くの飲食店やホストクラブの従業員らが仕事帰りなどに汗を流すという。

新田さんによると、多くの温泉は、山や川など自然の中での憩いを売りにして、サービスで付加価値をつけるのが常という。「最近の温泉はおもてなしに重点を置き、客を甘やかし過ぎていると思うことがあるが、ここは一切ない」と新田さんは驚く。「非日常を売りにするのではなく、日常の付き合いの延長上に温泉があるという新しい発見を学会で紹介したい」と意気込んでいた。

取材後、記者も湯につかった。湯はぬるめ。脱衣所でお年寄りに「あなたと私、服の趣味が合うわね」と話しかけられ、会話が始まった。

学園だより

広島修道大学50周年記念事業報告

■50周年記念式典・祝賀会

11月6日、本学が修道短期大学を母体に4年制大学を開設してから50周年を迎えたことを記念して、学術シンポジウム、記念式典並びに祝賀会をリーガロイヤルホテル広島で開催した。

ロビーでは「50年の歩み展」と題し、記念展示を行った。また、本学法学部国際政治学科開設20周年を記念したシンポジウムと、第46回同窓大会も同日開催された。

◇50周年記念関連 開催プログラム

1) 学術シンポジウム「<修道>

—その軌跡と展望—を開催

本シンポジウムは、3名のパネリストが日本史、中国思想史、西洋哲学の側面から<修道>の解釈をグローバルかつ歴史的に紐解き、過去から未来への示唆について論じた。コメンテーターの南山学園理事長マルクス氏から、大学を取巻く危機的状況に立ち向かうには、大学の特色を強く打ち出すことが重要なことであり可能性を広げることに関がると提言を受けた。最後に、本学の建学の理念に基づいた教育方針についてコーディネーターの相馬教授が説明した。

コーディネーター：相馬伸一（人文学部教授）

パネリスト：落合 功（商学部教授）、藤井 隆（法学部教授）、松田克進（人間環境学部教授）

コメンテーター：ハンスユーゲン・マルクス氏（南山学園理事長）

2) 記念式典

文部科学省の河村私学部長はじめ約300名の来賓を迎え、午前11時からロイヤルホールで開催された。林理事長の式辞で始まり、文部科学大臣、私立大学連盟副会長、石田学園理事長の祝辞をいただき、市川太一学長が「次の50年に向けて」と題し本学の使命を踏まえた取組を紹介し、今後の

発展に向け決意を述べた。最後に、狂言役者の丸石氏が50周年記念式典を寿ぐ祝いの舞「福の神」を披露した。

式辞：理事長 林 正夫

祝辞：文部科学大臣代理 河村潤子氏

（文部科学省高等教育局私学部長）

八田英二氏

（日本私立大学連盟副会長・同志社大学学長）

石田恒夫氏

（学校法人石田学園広島経済大学理事長）

挨拶：市川太一（学長）

祝舞：丸石やすし氏（卒業生・狂言役者）

司会：青山高治氏（卒業生・中国放送アナウンサー）

3) 記念祝賀会

挨拶：宇野伸浩（副学長）

乾杯：大田哲哉氏

（広島商工会議所会頭・広島電鉄株式会社代表取締役会長）

祝辞：有岡 宏氏（広島県副知事）

王 志偉氏（中国・暨南大学学長補佐）

呂 博東氏

（韓国・啓明大学校国際学大学日本語学科教授・前副総長）

広島銅蟲制作者紹介：

若山裕昭氏（広島市立大学芸術学部学部長）

演奏：吹奏楽団

学歌斉唱：混声合唱団

閉会挨拶：廣光清次郎（経済科学部長）

司会：青山高治氏（卒業生・中国放送アナウンサー）

4) ジョイントステージ

出演者：

落語：古今亭菊丸氏（卒業生・落語家）

卒業生によるバンド演奏

1) いちごの木 2) カントリーマスターズ

3) HCCキューバンナイツ

司会：放送研究会（明賀夢実さん、増田真吾くん）

■50周年記念講演会（小松弥生氏）

11月5日、図書館ライブラリーホールにて、本学元学長の隅田哲司氏の令嬢、小松弥生氏（文部科学省文化庁文化部長）による記念講演が行われた。「学問への思い、学生への思い」のテーマで、隅田元学長の本学内外での活動や家庭での思い出などが語られた。

■法学部国際政治学科開設20周年記念シンポジウム

法学部国際政治学科は2010年に開設20周年を迎えた。これを記念して、2010年11月6日にシンポジウムを開催した（於：リーガロイヤルホテル広島）。市川太一学長の開会挨拶に続き、矢田部順二教授が設立から今日までの学科の歩みを紹介した。続いて広本政幸教授の司会で、パネリストが今後の国際社会の展望と、その中での日本、広島のあり方を語った。

高原明生氏（東京大学大学院教授）は東アジアの統合を例にとり、国際政治研究が理論・地域研究・歴史・新しい問題、の四つの研究領域からなり、それを学ぶことの意味と魅力を語った。大島寛教授は、日本が依然新たな価値観を構築できていないとして、日本は「自立した対米関係」を目指すべきと強調した。佐渡紀子准教授は脅威の多様化に着目し、広島が平和を発信し続けるためには多様な被害者との共感と協働が重要と指摘した。王偉彬教授は、中国と日本は異なる法則で発展しており、今後中国と日本は依存と競合の時代に入ると分析した。

シンポジウムは参加者との質疑応答ののち、司会者より、国際政治学科が地域社会の支援のもとさらなる発展を目指していくとの決意が述べられ、閉会した。

パネリスト：

高原明生氏（東京大学大学院教授）

王偉彬（法学部教授）

大島寛（法学部教授）

佐渡紀子（法学部准教授）

司会：広本政幸（法学部教授）

■明治法曹文庫講演会

テーマ：「江戸から明治へ法の継受を考える」

11月10日、本学50周年記念の一環として、山口繁氏（元最高裁長官）による明治法曹文庫記念講演会が「江戸から明治へ法の継受を考える」を演題として開催され、本学教職員・学生のほか、広島県の法曹関係者や一般の方々を含めて、およそ300名が耳を傾けた。

山口氏は、本学が構築している「明治法曹文庫」に触れ、日本法の近代化を物語る格好の実物教材であるから、できるだけ多くの人が観覧し、そこから学んでほしいと話された。

■出版物

「広島修道大学五十年史」・「目で見る修大50」が完成

50周年を記念して、「広島修道大学五十年史」・「目で見る修大50」を発行した。

●広島修道大学五十年史

・914ページ（一部カラー）

・販売価格 3,000円（税込）

●目で見る修大50（写真集）

・105ページ（カラー）

・販売価格 2,000円（税込）

取り扱い店

広島修道大学生生活協同組合ブックストア

TEL (082) 848-5125/FAX (082) 830-1372

フタバ図書（広島市西区観音本町2-8-22）

TEL (082) 294-3322/FA× (082) 294-0170

■『明治法曹文庫目録』の「増補改訂版」を刊行

本学開学50周年記念事業の一環として、『明治法曹文庫』の目録の冊子「増補改訂版」を、本学の「『明治期の法と裁判』研究会」（代表：法学部教授矢野達雄）と協同して刊行した。

幕末から明治維新の王政復古、更に近代的法治国家形成へと変遷する歴史過程を如実に示すものであり、わが国法治国家の原理の淵源を探求し研究する一級の一次資料といえる。

『明治法曹文庫目録』増補改訂版（非売品）

監修：矢野達雄、加藤高

編纂：森上幸雄

発行：広島修道大学図書館 2010年11月4日

第63回 修道高等学校卒業式

平成23年3月5日(土)第63回修道高等学校卒業式が、昨年3月に竣工された総合体育館での最初の卒業式として執り行われ、288名の卒業生を送り出しました。そして、新たに修道学園(中・高)同窓会に288名が入会することとなりました。

〈同窓会長祝辞〉

同窓会長祝辞

修道高等学校第36回卒業式に臨み、修道学園中・高同窓会を代表いたしまして、ひとことお祝いの言葉を述べさせていただきます。

皆さんご卒業おめでとうございます。

本日めでたく卒業された皆さんを、我が同窓会にお迎えましたことは、同窓生一同心からの喜びであります。

この度の栄えあるご卒業は、皆さんの日々たゆまぬ努力の結晶であることはもとより、これまで慈しみ、育んでこられた保護者の皆様や校長先生をはじめ多くの教職員の方々の献身的なご指導によるものであることも忘れないでいただきたいと思ひます。

ご存知のように同窓会は、修道の名のもとに、世代を超えて相集い、会員相互の親睦と母校修道の発展を目的として日々活動を続けており、本年の8月で創立100周年を迎えます。2万8千余名を数える多くの同窓生は、政治、経済、文化、法曹、教育、医療等のあらゆる分野で活躍をされ、わが国はもとより広く国際社会において貢献しておられます。

やがて、皆さんも各界で活躍されることになり

ますが、どうか地元広島はもとより他の地域や職域の同窓生と、積極的な交流を図ってください。

論語に次のような言葉があります。「四海の内、皆兄弟なり。」四海は四つの海。すなわち世界、あるいは世の中を指す言葉です。「兄弟がいないなどといって悲しむことはない。人に真心をつくしてつきあえば、世の中の人、皆、君の兄弟である。」という教えです。皆さんは、これから折りに触れ、数多くの同窓生に接する機会があると思ひます。

人と人との交流には、この言葉が説くように、真心で接していくことが大切であると思ひます。やがて結ばれた相互の強い絆は、必ずや皆さんの大きな支えになるものと確信をいたしております。

さて、皆さんは今日を境として、自身の「志」の実現に向けてさらなるチャレンジを続けられますが、その道のりには、多くの艱難辛苦が立ちほだかると思ひます。

かかる時にこそ、修道で培われた“修道魂”を遺憾なく発揮され、力強く乗り越えていただきたいと念じております。

結びに、皆さんの今後ますますのご健勝を心からお祈りいたしますとともに、次代を担う有為な人材となられることを切望して、私のお祝いの言葉といたします。

本日のご卒業、まことにおめでとうございます。

平成23年3月5日

修道学園中・高同窓会
会長 大田 哲 哉



連合会ニュース

広島修道大学50周年に協賛 2 団体公演・10団体の記念誌を出版援助

仲井正美 (大商1回)

この事業は、広島修道大学50周年記念事業にあわせて、記念事業を実施する「大学サークルOB・OG会」に対して協賛援助金を支給し、50周年記念事業や大学をPRし、大学とOBの連携を深めることを目的として実施されたものである。この事業に対する応募は16団体であったが、個人を除いた14団体（公演2、出版12）で審査の結果、14団体に決定し出版事業等を実施した。

この協賛援助金の意義について述べれば、この援助金によって多くのOB・OG会が50周年を区切りに各サークルの視点から「記念誌」をまとめたことである。とくに、空手道部は五十年を網羅して回顧し出版、祝賀会を行った。硬式野球部の場

合「広島六大学リーグ」発足以来の輝かしい伝統を記録に残した。「しょうえん」は先輩OB脇田義信氏（故人）を広島の演劇界との関連で回顧している。硬式庭球部はOB会としては、初めてのDVDによる映像記録を記念式で放映し好評を博している。そのほか、ボート部、ヨット部、サッカー部、修経（修道大学経済人の集い）、柔道部、マンドリン部が記念誌を刊行した。

協賛事業で出版した記念誌は、図書館展示ホールで展示されています。また、このたび刊行した記念誌は合冊して図書館と総合企画課にて保管することになっている。

協賛団体の事業概要は次のとおりである。

記念公演等 2010年

事業名・主催団体	日時・場所	備考
1. しょうえん会創立50周年記念公演 しょうえん会 会長 飯村正三	9月18日（土）18:00 9月19日（日）13:30 広島市青少年センター	ソートン・ワインダー作「わが町」 演出 石本竜介
2. 50周年記念 第26回定期演奏会 吹奏楽団OB・OG会 会長 大石陽三	11月28日（日）14:00 西区民文化センター	学歌演奏・「50」に係わる曲の演奏

出版事業 2010年

事業名・主催団体	発行月日・概要	備考
3. しょうえん50周年記念誌 しょうえん会 会長飯村正三	2010・12・24発行 100回公演の記録 79頁	1960～2010の記録・スタッフ写真・寄稿文
4. 硬式野球部創部50周年記念誌「学&走攻守」会長盛井浩	2010・10発行 176頁 硬式野球部の歴史	野球部の歴史・活動記録・寄稿文・資料編・六大学リーグ優勝楯
5. 硬式庭球部OB会50周年記念DVD「硬式庭球部50年のあゆみ」会長坪井宏	2010・10・9 発行 120部配布 50年の記録映像	記念式出席者 OB会員102 来賓7 現役26 計135名

6. ボート部50周年記念誌 会長 川端伸夫	2010・10・23発行 50年の記録	広島県ボートの歴史と修道大学の歴史・友よ(追悼文)・会員名簿・新聞記事
7. ヨット部50周年記念誌 つつみ 会長 朝尾博謙	2010・11/23発行 48頁 カラー 300部 50年の記録	10年毎展望(寄稿文・部員・写真)
8. 空手道部OB会誌「無衣」 創部50周年記念特集 会長 掘井庸之亮	2010・9・19発行 DVD作成(当日放映) 50年の記録	寄稿文・祝賀会出席者名簿・空手道50年のあゆみ・思い出アルバム
9. サッカー部50周年記念誌 逆境に勝つ 会長石田一雄	2011・1・15発行 写真と年譜の50年	新聞記録、写真、年譜
10. 修経 創刊号 修経会出版代表 加藤省吾	2010・12・20発行 72頁 近況と抱負	寄稿文(28名・略歴紹介・写真)
11. 柔道部50周年記念誌 心技体 柔道部OB会 会長 天倉康博	2010・11・27発行 37頁 50年の記録	柔道部史・思い出のプログラム・栄光の記録
12. マンドリン部45周年記念誌 マンドリンOB・OG会 会長 山樋明洋	2010・12・28発行 56頁 マンドリン45年の記録	45回の定期演奏会の記録・曲目、演奏者、運営幹部名、顧問の記録、50年の年表

※文芸倶楽部、修水会の2団体は都合により辞退したため、協賛援助はのべ12団体・事業となった。



図書館展示期間は2011・1・27～4・27

事務局だより

訃報

平成23年度同窓大会開催一覧

◎広島修道大学大学院同窓大会

開催日時：平成23年6月（日時未定）

会場：ホテルJALシティ広島

（広島市中区上幟町7-14）

TEL 082-223-2580

《お問い合わせ先》

広島修道大学大学院同窓会事務局（石井健二郎）

TEL 0824-22-2171

◎修道学園（中・高）同窓大会

《同窓会発足100周年記念大会》

開催日時：平成23年9月3日（土）

開始時間（未定）

会場：リーガロイヤルホテル広島

（広島市中区基町6-78）

TEL 082-502-1121

《お問い合わせ先》

修道学園（中・高）同窓会事務局

TEL 082-241-6686

◎広島修道大学同窓大会

開催日時：平成23年11月5日（土）19：00～

会場：リーガロイヤルホテル広島

（広島市中区基町6-78）

TEL 082-502-1121

《お問い合わせ先》

広島修道大学同窓会事務局

TEL 082-830-1321

阿曾沼龍雄 氏（修道学園同窓会連合会幹事、修道学園（中・高）同窓会幹事）

平成22年10月8日 ご逝去 享年81歳

氏は平成11年10月から修道学園同窓会連合会及び修道学園（中・高）同窓会の幹事を務められ、同窓会活動にご尽力いただいた。

能宗 章治氏（元修道高等学校教頭）

平成22年12月19日 ご逝去 享年80歳

氏は昭和29年4月1日に修道学園教諭として就任。高等学校教頭を務められ、生徒の育成・指導にご尽力いただいた。

心からのご冥福をお祈りいたします。

会報誌へのご寄稿、支部、同期会などのご報告につきましては、ご多忙にもかかわらずご協力いただき誠にありがとうございました。今後も会報誌への記事を募集いたしておりますので、積極的に原稿をお寄せいただきますようお願いいたします。次回の発刊は平成23年9月の予定です。